

## 発展期を迎えた先端基礎研究センター

環境・資源利用研究部 棚瀬正和

私は平成9年4月にセンターに移ったが、辞令交付の翌日に、早速伊達センター長の概算要求のヒアリングがあったと記憶しています。センターは走りながら考える“ところ”であるとの第一印象を受けました。当時、複雑な課題として、第1期（平成5年度から5年間）から2期への移行、すなわち9テーマが終了し継続も含め新しく9テーマが立ち上がることと、終了するテーマの内3テーマに関連する研究者らが他部に異動することに対する、スムーズな移行措置がありました。そのため、新旧各テーマの研究概要、位置付け、（考えられる）成果などの把握に務めるとともに、特に、他部への異動に関してはその考え方、方法も含め、当センターを含め多くの人のアドバイスを受けつつ実施しました。実施後、何人かの意見を聞きました。一部で予算や研究内容で不整合が生じましたが異動先の配慮で何とか解決できました。

このような複雑な課題に対応している間にも、予算関係や黎明関係、研究評価、交流棟建設、等々、仕事は多い。なぜか、と考えると、センターでは、研究はもちろんだが事務も含め、継続的要素が少ないからだ、と気がつきます。何につけ、常に先端でなければならない、という思いがあるのです。初代センター長の伊達先生はその幅広い知識と見識でセンターをグイグイ引張って行かれます。研究者に対してもそうだと思いますが、何をすべきかを的確に指示されるからその点は悩まなくてもよいのです。どう進めるかを考えればよいのです。しかし、この方法が時として、難しいことがあります。伊達先生は、「先端基礎研究交流棟」の完成記念特別講演会で「それは、“勢”の問題で臨機応変にやること」だと明解ではありますが…。

私の任期の終盤、平成11年4月には、伊達先生から安岡先生へのバトン・タッチがありました。伊達先生が築かれたセンターの基盤を発展させるため、安岡先生は、昨年10月の「原研」に見られますように、ウラン及び超ウラン科学を始め、4項目を当面の目標と定められ、「センターと研究者を国際的に通用する一級品に成長させていくことが私の使命」とされ、その実施に向けて着々と準備されました。

このように、私は先端基礎研究センターの創成期の後半から発展期の始めにかけ、また、伊達先生から安岡先生への引き継ぎの節目にあたり、その役目を十分に果たせたかどうかは全く自信がありませんが、このような変化の激しい、重要な時期にセンターにはお世話になりました。センターの皆さんに感謝いたします。

最後になりましたが、ここで、昨年の9月30日に起こったJCOの臨界事故に関して、少し述べさせていただきます。この事故の影響は、現在進めている原子力の研究開発に非常に大きな影響を及ぼすと考えられるからです。センターもその影響を受けるのは、必至だと思います。しかし、このような厳しい状況の中でも、安全に対する対応を十分に図りつつ、国民に信頼されるよう優れた成果を出していかなければならない使命があるように思います。すなわち、原子力のエネルギー開発に関する厳しい見通しが迫られる中、直接にはエネルギー生産に係わらない研究開発の領域の拡大（多様化）の一環として発足した当センターの活動は、ますますその重要性を増すものと考えられます。

今後、安岡先生を中心に、益々発展されることを祈念し、筆を置きます。